

小林一茶と連句（俳諧連歌）

——「初雪や」（歌仙）の巻——

一、はじめに

一茶の俳諧連歌について、「一茶の農民意識」（聖徳学園岐阜教育大学国語国文「第17号」）、「小林一茶と連句（俳諧連歌）——「鼻先の」（歌仙）の巻——」（岐阜聖徳学園大学国語国文「第30号」）で、その特徴を提示してきた。

寛政四年から同十年まで一茶は西国行脚に出ている。この旅は、師事していた二六庵竹阿が亡くなり、師の知友を訪ねての、俳諧修行を目的としたものであった。この旅中で松山に立ち寄った折りに、栗田樗堂^①と交友を結び、寛政七年一月、同八年七月、十月、十一月、十二月、同九年一月（二巻）に七度歌仙を巻いている。

本稿では、寛政八年十月に栗田樗堂と巻いた「初雪や鳥屋の鳥の朝の声」を発句とする歌仙を取り上げたい。

二、表（オ）

- | | | |
|---|---|----|
| 1 | 初雪 ^{はつゆき} や鳥屋の鳥の朝の声 | 樗堂 |
| 2 | 堀 ^{まむき} を真向に寒き茶烟 ^{ちやけぶり} | 一茶 |
| 3 | 草の中元結 ^{もとしひ} 干ス杭打ぬらむ | 堂 |
| 4 | 蜻蛉 ^{とんぼ} つい行終 ^{ゆきつひ} かへる月 | ゝ |
| 5 | 片照 ^{かたてり} の続 ^{つづ} ばつゞく秋風に | 茶 |
| 6 | 飯籠 ^{めしかこ} 釣ルすうら口の露 | ゝ |

樗堂の発句は「今年初めての雪であるよ。朝の時を告げる鳥の鳴き声が聞こえて目が覚めた。寒いと思ったら雪が降っている。さっきの鳥は今年初めての雪が降っていることを知らせるように鳴いたのかもしれない。」の意味。季の詞は「初雪」で、冬。「や」の切字、名詞止を用い、発句の格を有しつつもさらにと詠まれている。初雪

藤 田 万喜子

が朝の空気を清らかに包んでいる。

この意を汲み取って一茶は

2 堀を真向に寒き茶烟

と脇句を付けた。季の詞は「寒き（寒し）」で、冬。体言止。「茶烟」は、朝茶の用意の炊煙。発句の雰囲気を考え、初雪の中、寒さに凍えるように茶烟が広がっている風景を詠んだ。

芭蕉の句に、「馬上にうとうとと残りの夢を結んでいたが、ふと気が付くと、有明月が遠くかすかにかかり、人家からは朝の茶を煮る煙が立ちのぼっているよ。」という意味の

馬に寝て残夢月遠しちやのけぶり^③（「野ざらし紀行」）がある。

第三は構堂が付け、

3 草の中元結干す杭打ぬらむ

であった。季の詞は含まれておらず、雑の句。「らむ」留め。茶を煮ている人を配し、「元結を干す杭を打っている」とした。第三は大きく転じる役割を担う。

次句を促す付けとなったが、交互に付けず、次の短句も構堂が

4 蜻蛉つい行終かへる月

と付けた。季の詞は「月」で、秋。蜻蛉も季の詞であるが、表の月の定座を引き上げているので、「月」が季の詞であろう。この句は、

「空一面に飛んでいた蜻蛉が夕方になっていなくなってしまった。

その空には代わりに見えなかった月がまた戻って来たように出ているよ。」の意味。蜻蛉がいなくなったのを「行く」と言い、月が現れたのを「帰る」と表現した。対の言葉で戯れ、言葉のおもしろさを内包する句である。

これを承けて五句目、一茶は

5 片照の続ばつゞく秋風に

と、山と野原を配置した。季の詞は「秋風」で、秋。「山を月が照らしているところに秋の風が吹き、その風が野原をずっと遠くまで吹いて行くよ。」と山に月が片照らしている情景にしたのである。「続ばつゞく」というのは山裾からずっと秋風が吹き抜けていく状態を表現したものである。

次の折端の短句も一茶が

6 飯籠釣ルすらら口の露

と続けて付けた。季の詞は「露」で、秋。「風がずっと吹き抜けて、それが農家の裏口まで吹いてきて、吊るされている飯籠を揺らしている。その辺りには折から露が降りている。」と前句の「秋風」を承けて場面を転換させた。

「片照」を承けて「すらら口」、「秋風」を承けて「釣ルす」が導き出された。それによって場面は戸外の広い景から家の裏口に移り、

焦点が小さく絞られた展開となっている。「野原」↓「うらロ」↓
「飯籠」↓「露」と絞られてゆくことで軽い緊張感が出て表六句の
締めくくりとしてふさわしい句である。

以上、表六句では比較的变化の小さい叙事叙景の展開が見られた。

三、裏（ウ）

7	ほだしなる仏も人にうち呉て	堂
8	合歛の花塚築きつる哉	茶
9	夏かすむ水の曙おもしろや	堂
10	泳めりくゝ檻にくだきて	茶
11	県女を右の御座に召れつゝ	堂
12	おもひ切レとの仮の捌に	茶
13	賭に舟取られぬる松浦がた	堂
14	やたらに火焚夜の函	茶
15	虎吼る古き霊屋の秋の月	堂
16	霧吹はれて花紅葉ちる	茶
17	芋汁に二日なぐさむ親のもと	堂
18	小切貰て糟袋ぬふ	茶

表の折端は一茶の「飯籠釣ルすうら口の露」であった。これを承
けて展開された句が、右の7から18である。

折立の句を禱堂が

7 ほだしなる仏も人にうち呉て

と付けた。季の詞はなく、雑。この句の「人」は、前句の「飯籠釣
ルす」家の主と見立てて導き出されたのであろう。叙景を人情に転
換させたもので、「裏口に飯籠を吊るしている家では、仏様を大事
にお守りしているが、そのためにいつも行動がままならない。出掛
けたいのに出掛けることも出来ない。その仏様を今日は人に任せて
解放されたことよ。」の意味。

「ほだしなる」仏を人に預けたものの、気にかかっているのかも
しれない。信心深い姿が表出されている。場面ががらりと変わり、
裏の展開の初めとしての動きが出ておもしろい。

これを承けて一茶は、

8 合歛の花塚築きつる哉

と付けた。季の詞は「合歛の花」で、夏。合歛の花と塚を取り合わ
せたもので、この塚は前句の仏から連想されたのであろう。「仏を
人に任せた人は何をしているかという、合歛の花のような塚を築
いているところなのだ。人に任せるようなことも実はやむを得ない
ことだったのだ。」の意味。この塚は「ほだしなる」仏様のものか

もしれない。合歓の花の配置が明るさ、華やかさを感じさせる。この付け方から一茶の信仰心の深さが窺える。

この合歓の花の、はけ状のぼわっとした感じを承けて檣堂は、

9 夏かすむ水の曙おもしろや

と付けた。季の詞は「夏かすむ」で、夏。「夏の夜がほのぼのと明け始めようとしている頃、ちよどこかすみがかかってきた。その黄色がかった淡紅色の曙の空が水面に映って、なんとも趣のある光景であることよ。」という意味である。続いていた人情の句を叙景に転換させ、しかも土から懸け離れて湖の水を配置して変化のある展開とした。

これを承けて一茶は

10 氷めりく／＼櫃にくだきて

を付けた。季の詞は「氷」で、冬。季移りになっている。水を氷に転じさせた展開で、「時が過ぎてやがて冬になり、その水をめりめりと薄く板のようにくだいているよ。」とした。氷をへぎにくくく様子を「めりめり」という感覚で表現したところに一茶らしい特徴が出ている。

続いて檣堂が付けたのは

11 県女を右の御座に召れつゝ

で、季の詞はなく、雑。「県女」は、田舎の女、農村の女のこと。

「右」は右の大臣の略であろうか。この句は前句の場面を高貴人の御座での出来事と設定し変えたものであろう。「身分の高い人が農村の田舎娘をみそめられた。そして、その娘を御座にお呼びになつて侍らしつつ、折折敷（へぎおしき）の上で氷を砕くのをご覧になっているよ。」というのである。女と男が登場し、ここで恋の句となる。これを承けて一茶も

12 おもひ切レとの仮の捌に

と、恋の句を続けた。季の詞はなく、雑。県女は不本意なのであろう、それを諭すように「その思いを断念せよと、その場の間に合わせの言葉でうまく処理をした。」と付けたのである。

これを承けて次に展開するのであるが、この思い切る内容を今度は賭け事に負けた悔しさに転換させて檣堂は、

13 賭に舟取られぬる松浦がた

の句を付けた。季の詞はなく、雑。「賭け事は海に生きる男の遊びの一つ。この男は自分の生活の糧を稼ぐ大事な道具である舟を賭けて勝負をしてしまった。勝つはずであったが負けてしまい、舟を取られてしまった。それで、もう舟はあきらめよと間に合わせに説得されている。」というのである。

「松浦がた」は松浦潟で、佐賀県唐津湾の虹ノ松原に沿う海域一帯の呼称、歌枕。任那へ行く大伴佐提比古の船を高山から領巾を振つ

て見送った松浦佐用姫の伝説で有名。伝説を連想させる取り込みで、恋の句から離れることになった。

これを承けて一茶は

14 やたらに火焚夜の両図

と付けた。季の詞は「焚火」で冬かと思われるが、雑であろう。「やたらに」は賭け物の舟を取られてしまった男の心情から導き出された言葉であろう。「舟を取られて途方にくれているうちに夜になってしまった。しようがないからとにかく火を焚くことにした。めちやくちに木をくべて焚火の炎を立ちのぼらせている。その男の影が影法師のように動いている。」の意味。「やたらに」というぶっきらぼうな表現と夜の影法師の取り合わせによって何か不気味さが加わった。

この不気味さが次の禊堂の

15 虎吼る古き霊屋の秋の月

の「虎吼る古き霊屋」を導いた。季の詞は「秋の月」で、秋。人情の句が続いたので叙景に転換。場面が変わり、不気味さの感覚も一変する。「霊屋」は葬送の前にはばらく遺骸をおさめておく所、霊殿。また、靈魂をまつてある建物、霊廟。句の意味は、「おそろしい虎が吼えて出て来そうな古い霊殿であるよ。しかし、折からの秋の月が出て、照らし出されている。それは、いかにも清い感じが

することだ。」となる。月の定座がこぼされている。

これを承けて一茶は

16 霧吹はれて花紅葉ちる

と付けた。季の詞は「霧・花紅葉」で、秋。前句の不気味さを霧と見立て、「立ち籠めていた霧が晴れて、辺りが明るく、視界がきくようになった。すると紅葉も散る頃らしく、花のように色鮮やかな紅葉が散っているよ。」というのである。不気味な光景が春秋の自然の象徴としての美しい景色に転換された。「花紅葉」には花と紅葉という意味もあり、ここでは花の座を潜在させたと考えたい。

これを禊堂は

17 芋汁に二日なぐさむ親のもと

と展開させた。季の詞は「芋汁」で、秋。これは、前句の紅葉の散る場所を、ある家の庭に見立てて導き出されたもので、場面を転換して付けたのである。「奉公の休みでなつかしい親元に帰って来た。秋には美しく紅葉する木がある家である。久しぶりの再会で、親は好物の芋汁を作って呉れた。暖かい愛情に触れて奉公の辛さも慰められることだ。」という意味。

そして、一茶も

18 小切貰て糟袋ぬふ

と人情で承けて裏の折端とした。季の詞はなく、雑。「親から古着

などのいらぬ布地の小さな切れ端を貰い、ぬか袋を縫っている。これも親があつて親元へ帰つて来られる幸せのひとつであるよ。」の意味。親元へ帰つた心の安らぎがぬか袋を縫う余裕を導き、それを縫つて家でのひとときを過ごしたというのである。ぬか袋に庶民の生活環境が現れている。

裏の運びは表六句で禁じられていた神祇、釈教、恋、無常、述懐、霸旅、名所、人名等が許され、自在に登場することになる。裏は変化を重んじるのである。この両吟の場合も人情の句、叙景の句、恋の句、人情の句、叙景の句と交互に転じられ変化に富んだものであつた。また、素材をみても仏、塚、曙、冰、県女、右の御座、賭け物の舟、松浦がた、影法師、虎、霊屋、芋汁、ぬか袋など多彩で、いろいろな詩境が展開された。

四、名残の表（ナオ）

- 19 おとゝしの鍋の数さへ余所にして
20 けふぞ得がたき法の春風
21 山ざくら盛砂ちららす朝もよひ
22 炉の残興の一坐二服
23 鶴に乗て橋立見たきとばかりに
- 茶 堂 茶 堂 茶

- 24 ひとり棹す千賀のうら島
25 売のこる管抵捨し北時雨
26 煩ふ馬の葉問ひけり
27 井一ツをもやひ長屋の薄月夜
28 娘やりたき星の陰言
29 ほつくと延に這す秋蚕
30 魚買寺の箕を提て出る
- 堂 茶 堂 茶 堂 茶 堂

名残の表の展開に入つて、長句・短句の付順が入れ替わっている。一茶の折立の句、

- 19 おとゝしの鍋の数さへ余所にして
は、前句（裏の折端）である「小切貫て糟袋ぬふ」と合わせて考えると「おとしにはあのたくさんあつた鍋までも今はない。余所に置いてきてしまった。そのようななかで余所から小切れを貰い集めて風呂などで使用する糟袋を縫つて、つましい生活をしているのであるよ。」の意味となる。おとしとは違つてしまったというひねりが「鍋」という日用品で、うまく表現されて一茶らしい特徴が出ている。季の詞はなく、雑。
- これに楞堂は
20 けふぞ得がたき法の春風

と詠んだ。季の詞は「春風」で、春。「なんと春らしい風が吹いているよ。今日のような日はめったに得ることができない。この仏恩の春風を満喫している、鍋などのことは余所に置いておいて。春風の今日は仏の教えに導かれているようだ。」というのである。

「法の春風」と措辞したことで前句の生活の匂いが消えてしまった。

この法の春風が山峡にも吹いてきてと見立てて一茶は、

21 山ざくら盛砂ちららす朝もよひ

と展開させた。季の詞は「山ざくら」で、春。「盛砂」は、うずたかく盛り上げた砂。儀式のときや貴人を迎えるときなどに、車寄せの左右に編み笠のような形に高く丸く盛った砂のこと。「山桜が美しく咲いている。それを見るためにやってくる貴人がいるのだからか、盛砂が朝早くからうず高く盛ってある。それを春風が散らして崩しているよ。そんな朝の様子がすがすがしい。」の意味。里の生活風景から山の景色へと転じた。

禊堂はこれに

22 炉の残興の一座一服

と付けた。前句の山桜見物の人々に焦点を当てた人情句の運びとしている。季の詞は「炉」で冬だが、雑の意識であろうか。「前の晩には山桜見物の炉を囲んでいろいろな興があつて賑やかだった。その楽しさの残興が一座に漂っているよ。それぞれがその余情を胸に

一服している。」とした。「残興」「一座」「一服」という漢語を使用したリズムのある短句である。

この「残興」「一服」に焦点を合わせつつ一茶は、

23 鶴に乗て橋立見たきとばかりに

と付けた。季の詞は「鶴」で、冬。「橋立」は、日本三景の一つである丹後宮津湾の天の橋立のこと。「今度は皆で鶴にでも乗って、白砂と青松の美しさで名高い天の橋立を見に行きたいものだ。そんなことを言いながら一服しているよ。」というのである。「一座一服」の一座の人の気持を表現する形で展開させた。日本三景の一つと鶴を取り込んだことで美しい景色が浮かんでくる。また、鶴が飛ぶものであることから広がりが出ている。次句の飛躍的な展開が導きやすくなった。

果して禊堂は、

24 ひとり棹す千賀のうら島

とすっかり場所と場面を変えて付けた。鶴に乗って行き着いたのが「千賀のうら島」だったという設定である。「千賀のうら」は、肥前松浦郡の地名で、歌枕。季の詞はなく、雑。「千賀のうらに舟が浮かんでいる。その舟を一人の男が棹を操って進めている。鶴に乗って天の橋立を見たいと思っているのに。」の意味。

これに一茶は、

25 売のこる菅（菅） 菰捨し北時雨

と付けた。季の詞は「北時雨」で、冬。これは前句の「ひとり」を承けたもので、この男を菅菰売りの男と見立て、「舟をすすめては、菅菰を売って歩いてしたが、売れ残ってしまったてどうにも売れない。そんなところへ風を伴って北の山の方から急に雨が降ってきた。それで、売れ残った菅菰を捨てて行くことにした。冷たいにわか雨が身につまされる。」というのである。

これに構堂は、

26 煩ふ馬の葉問ひけり

と付けた。季の詞はなく、雑。舟に乗って菅菰を売っていた男を馬を引いての行商者に見立て替え、しかも病気の馬を登場させて場面を一変させている。「馬の荷物であった売れ残った菅菰をみんな捨ててしまつて苦しむ馬をいたわりながら冷たい雨の中を男が来た。そして、その男は馬の病気を直すべく葉をたずねているよ。」というのである。

25および26の句は、俳諧連歌が変化を旨とするため当然ではある

が、飛躍的な展開でおもしろい運びとなっている。次句は一茶の特徴である庶民の生活が扱われる。

この男がたずねた場所を一茶は

27 井一ツをもやひ長屋の薄月夜

と付けて表した。季の詞は「薄月夜」で、秋。ここの月の定座が引き上げられている。「長屋にあるたった一つの井戸、これを長屋の人達は共同で使用している。各家のおかみさんが集まって賑やかな夕暮れのひとときである。空には折から薄雲にさえぎられて月がほのかに照らしていることよ。」と詠んだ。同情した長屋の人達がわいわいと病気の馬を囲んで話をしている様子まで想像できる世界が作られた。庶民の生活へ一変させたという点で一茶的特徴である。

この恋の呼び出しを承けた構堂は、

28 娘やりたき星の陰言

と付けた。季の詞はなく、雑。長屋に美しい娘がいるのだろう。「その娘をどこかいとところにつかわしてやりたい。そんなことを星の陰言のように井戸端で話していることよ。」の意味。月夜から星を連想し、長屋の人達のうわさ話としたのである。庶民の生活に天文の星を配して現実味を飛躍させつつ変化させた。

一茶はこの句に

29 ほつくと庭に這す秋蚕

と付けた。季の詞は「秋蚕」で、秋。娘のいる家で蚕を飼っていると見立て、「飼っている小さな秋蚕を庭の上に置いて、そろそろと動くのを眺めている。」という場面にした。娘が農家に嫁いだと連想を発展させ、蚕飼をする農村生活とした。恋離れの句。秋蚕は春

蚕にくらべて飼育日数が少ないので小さくて弱いという、その特徴が「ほつくと」に表されている。畳語を使用したことで全体の流れにリズムが出て調子を高めている。

これに構堂は、

30 魚買寺の箕を提て出る

と付けて名残の表を結んだ。季の詞はなく、雑。「蚕を飼っている寺から魚を買うために箕を提げて出て来た。」というのである。蚕を飼っている場所を寺に見立て替え、そこで働く娘が寺では禁じられているはずの魚買いに行くことで滑稽味を出し、変化ある運びの終わりとした。

名残の表の展開に入って、先にも記したが、長句・短句の付順が入れ替わっている。付けの振幅が大きく変化のある展開となっている。

五、名残の裏（ナウ）

31 朝寝する堺の町のうら通

茶

32 ぬらくら同士の心やすさや

ゝ

33 松笠に爛焚風情旅に似て

堂

34 しばし星ある春の山小屋

茶

35 五里六里花の跡来る犬の声
36 ひがんの七日八日九日

堂
茶

一茶の

31 朝寝する堺の町のうら通

は、前句（名残の表の折端）で、構堂が「寺」に定めた場所を「堺の町」と見立て替えたもので、しかも裏通りの設定になっている。季の詞はなく、雑。堺は大阪の南に隣接している町で、室町時代に貿易港として栄えた所である。その裏通りと言うのだから港のにぎやかな表通りとは違ってうらぶれた所であろう。

「魚を買いに箕を提げて出て来るような堺のうら通りでは、朝寝をむさぼっている人もいるよ。世の中には日が昇るとともに立ち働いている人もいるのに。」の意味。前句が人情の句なのでさりとて叙景を加味して、また、滑稽味や皮肉を内包させての付けである。

次の句も一茶が付けており、それは

32 ぬらくら同士の心やすさや

で、前句の朝寝をする人物を「ぬらくら同士」と見立てた句である。季の詞はなく、雑。「裏通りに住む隣近所の人は皆朝寝をしているのだらう。朝寝をしているのは自分だけではない、ぬらくらりと暮らす者同士の心安さで、その後ろめたさも消えるようであるよ。」

の意味。

一茶の持ち味を生かした転じ方で興味深い。たいていの人は朝早くから起きて働いている。朝寝はもってのほかであろう。朝寝をする心地よさとその裏に存在する罪の意識、ぬらくら者の後ろめたさが伝わって来る。

この感情は後年の、

もたいなや屋寝して聞田うゑ唄^⑤

一茶（寛政十年）

という句にも通ずる。「もたいなや」の句には、「耕^{たがや}ずして喰ひ、織^おずして着る体^{てい}たらく、今まで罰^{ばち}のあたらぬふしきなり」^⑥の前書がある。農民の身であるのに耕さぬ、働かぬ身で生活している罪悪感を投影しつつ、ああ、自分はないことだなあと詠っている。

「ぬらくら同士の心やすさや」を承けた構堂は、その付けを

33 松笠に爛焚風情旅に似て

とした。季の詞は「松笠」（松ふぐり）で、秋。「心やすさ」を旅人の心安さに転換したのである。「のらりくらりと世の中を暮らしている者同士の気楽な気持ちは、松かさを集めてそれを燃やして酒の爛をしている、そんな物事にこだわらない生きざまのような旅の風情に似ている。」という。前句に軽く、変化なく付けている。

この長句に付けられた一茶の句は、

34 しばし星ある春の山小屋

で、酒の爛をしている場所を山小屋と定め、時間も夜に展開させたものである。季の詞は「春（の山小屋）」で、春。「山の天候は移りやすいのでいつまで続くか分からないが、しばらく星が出て美しい春の夜の山小屋、そこで酒の爛をして旅の風情を楽しんでいるよ。」とした。叙景句に転じたものの、「しばし星ある」で、しみじみとした情感が表されており、前句の持つ抒情を生かした付けとなっている。

次は花の定座、付けたのは構堂で、

35 五里六里花の跡来る犬の声

と詠んだ。季の詞は「花」で、春。動物を登場させているが、その裏には花見の人達が想像される。桜の開花は南の国からだんだん北の国へ移って行く、つまり、暖かい所から寒い所へ移っていくのである。それにしたがって賑やかな花見も移動するわけで、その移りを「五里六里」と表現したのであるうか。「春の山に登って山桜を楽しんでいると、どこかで犬の鳴き声がする。見るとこの辺りでは見かけない犬だ、何とも薄汚れて長い道のりをさまよって来たようなようすである。まるで、桜の花を追って来たようであるよ。」としたのである。「五里六里」というリズムのある語感や「犬の声」という聴覚の感覚から明るい感じが漂う。

この気分を生かして一茶は、挙句を

36 ひがんの七日八日九日

とした。季の詞は「彼岸」で、春。彼岸は春分の日を中日としてその前後の七日間をいう。「五里六里と花を求めてやってきたが、ちょうどお彼岸で、面白いことに七日八日九日が彼岸にすっぱり入っているよ。なんと語呂のよいことか。」と結ぶのである。数が並んで面白がって笑っているようすが想像されるようである。

歌仙、両吟の締めくくりとして、一茶は数を利かせて軽く付けた。しかもその数が続くように「七日八日九日」とリズムよく、のびやかに収めた。これは孕句であると思われるが、頓知のきいた一茶らしい特徴をみることができる。

名残の裏の展開は変化が少なくそれぞれの前句の詩心を生かした付け方がみられた。

六、おわりに

この歌仙は、一茶と樗堂の両吟であった。

・素材をみると、一茶は、茶烟、飯籠、裏口、塚、榎、夜の両園、小切、槽袋、鍋、盛砂、天の橋立、売れのこる菅菰、井戸、長屋、菰、蚕、堺、裏通り、のらくら同士、山小屋、お彼岸、樗堂は、鳥屋の鳥の声、元結、杭、蜻蛉、ほだしなる仏、水の曙、県女、右の

御座、賭ものの舟、松浦がた、吼ゆる虎、古き霊屋、芋汁、親、法の春風、炬の残興の一坐、千賀のうら、馬の葉、娘、星、寺、箕、松笠、爛、旅、犬の声、となっている。樗堂の方が多彩で教養も感じられる。一茶には田舎、農村（庶民）的なものが多く、樗堂にはそのような素材が少ない。

・付合の運びに定座の引き上げやこぼしが見られる。また、季移りや季の揺れが見られる。付けの素材からも分かるが、大きな転換を伴っての付けは樗堂の方が多い。しかも、句姿の整ったものが多い。一茶は樗堂の力をバネに付けを進めようとしている。

・句数を見ると、一茶は十九回、樗堂は十七回。表（オ）はそれぞれ三回、裏（ウ）と名残の表（ナオ）は交互に付け合い（折が変わったところで交代）、名残の裏（ナウ）は一茶が四回で樗堂が二回になっており、分け合っている。しかしながら、連句（俳諧連歌）の約束（式目）からみると、発句を正客、脇句を亭主が詠み、月花の定座（二花三月）は亭主（主人）が客人に振る舞うことになっているのに、この歌仙では、発句は樗堂が、脇句は一茶が、月の座は一茶が一回、樗堂が二回、花の座は一茶が一回、樗堂が一回となっている。この結果を見ると、一茶は客人扱いをされていなかったということになる。しかし、この他の六巻の両吟の発句を調べると、一茶が発句を務めたものは三巻あった。一茶を樗堂は二六庵竹阿の流

れをつぐ者として認め、受け入れていたと分かる。

この時期に得た二人の交友の深さは、樗堂の

も一日留めんと

鐘の声翌はふるべき春がすみ

(「さらば笠」)

という錢別吟や一茶が樗堂の書簡「梅柳と申収候。いまだ御往生も不被成候由、夫もまためでたからむ歟。老はことの外に衰たり。活て居ると申ばかり、「只むかしをおもふ度、人恋しくぞ。最早生前御面会もあるまじく歟。」を用いて「大事の人」を亡くしたと悲しむ「三韓人」の跋に見ることができる。

以上を俳諧修行期の一茶の特徴の一つとして指摘したい。この後も一茶は旅を続けていく。

注

- (1) 愛媛県松山の人。初号蘭芝、別号二畳庵など。加藤晁台の門人。寛政七年一月十五日に樗堂は初めて一茶の訪問を受ける。翌八年秋から九年春まで一茶を長期滞在させ、歓待した。
- (2) 『一茶全集』第五巻 信濃毎日新聞社 昭和53年11月刊。
- (3) 『芭蕉文集』日本古典文学大系46 岩波書店 昭和43年6月刊。

(4) 高橋順子著『一茶の連句』に『鶴』はいまの歳時記では冬

だが、江戸時代には無季。」とあり、暉峻康隆著『季語の辞典』に「中世になると各地に飛来して居残る鶴も多かった上に、愛玩用として飼育する向きもあったので、鶴は無季としてその時々季語と結んで詠まれている。」とある。『一茶全集』(第一巻)には鶴の句を「雑」として収録している。これらを考えると「雑」になる。一茶は「雑」として詠んだのかもしれない。

(5) 一白宛書簡、一白は下総田川の俳人で、元夢の門人。二川書簡、二川は下総新川の今日庵社中の人。『一茶全集』第六巻 信濃毎日新聞社 昭和51年11月刊。

(6) 『一茶全集』第四巻 信濃毎日新聞社 昭和52年5月刊。

(7) 寛政十年までの六年間の西国行脚の東帰記念として関西各地の俳人の錢別吟を集めた俳諧撰集。『一茶全集』第六巻 信濃毎日新聞社 昭和51年11月刊。

(8) 『一茶全集』第六巻 信濃毎日新聞社 昭和51年11月刊。